二〇年代のヴェブレン
――あるアメリカ人の孤独――

榊原胖夫

(一)

ソースタイン・ヴェブレンほど多角的にとりあげてしかるべき歴史上の人物は少いであろう。彼のおよぼした影響がきわめて多方面にわたっているためだけではなく、ヴェブレンという個人がきわめて複雑な人間像をわれわれに提供してくれるからである。ヴェブレンの生前はもとより、とくに彼の死後、彼に関する論説、著書のごときも、ジョセフ・ドーフマンの古典的なものをはじめとして、数多いが、今日でもなおヴェブレンへの評価には固定したものはない。ヴェブレンにはさらに追求せられるべき深さと理解されるべき側面とが残されているのである。[1]

アメリカ経済学会では一九五七年一二月の年次大会においてヴェブレン生誕一〇〇年の試みとしてラウンド・テーブル討論を行っている。そこでヴェブレン研究家のジョセフ・ドーフマン、制度学派の経済学者として知られるアラン・グルーチ、わが国でもよく知られているポール・スウィージーがそれぞれペーパーを発表し、ヴェブレンの現代経済学におよぼした功績を再評価している。それらは多岐にわたるのと、本稿の主題からはなれるため紹介をさけるが、最近の経済理論の立場からしてもヴェブレンは決して、面白いがもはや古いものとして敬し遠ざけられるべきものではなく、示唆の豊かな源として、今日でもあふれるばかりのアイタリティをもつものとして、取扱われるべきことが示されている。[2]

ヴェブレンの興味ある個性もまた社会心理学的な立場から理解が深められつつある。リースマンの書物はその大きな一歩を劃した。リースマンはヴェブレンの中におけるイディオシンクラティックな要素をとりあげ、その分析からしてヴェブレンの考えや考え方を理解しようとところみたのである。[3]

本稿はこれらヴェブレンに関する最近の業績を利用しながら、それらとは視角をかえ、ヴェブレンの晩年をとりあげようとする。ヴェブレンが思想家としての成長をやめ、経済思想の変革者としての主な業績を終えて、彼の期待とはまったく逆の方向にすすみつつあった二〇年代――ビズネスの黄金時代――に生きていかなければならなかった孤独と絶望をとりあげようとする。その理由は二つある。

一、最近設立された同志社アメリカ研究所において共通研究論題が二〇年代、三〇年代と決定せられたこと。

二、ヴェブレンの貢献をたたえた論稿は多いが、ヴェブレンが彼の生きた時代のなかでいかに適応性がなく、いかに孤独であり、そして最後にはなぜ絶望に追いやられざるをえなかったか、を分析したものはほとんどないこと。

歴史の研究者が出来事の積極面をとりあげるのにはそれだけの理由があり、それだけの価値がある。しかし時には出来事の消極

的な面が見のがされることによって理解の深度が浅められることがないとはいえない。ヴェブレンの孤独は彼の思想と彼の生きた時代との相剋を示している。その意味では彼の失意と絶望を把握することがかえって二〇年代というものを理解するための搦手の鍵の役割を果すことになるかもしれないと思うのである。

(二)

ヴェブレンを評価するにあたって、彼がうけとったノールウェーの文化的伝統を強調する立場と、ヴェブレンの西部的性格を強調する立場とがある。前者の見解はドーフマンによって代表的に示されているように思われる。ドーフマンは次のように云う。

「ヴェブレンはアメリカに生れた。しかし実質的には、また文化的には、彼は移民であり、そして彼がたとえば十六才のときにこの国へ来たのと同様であろう。彼の一生はこの二つの文化の真正面からの衝突を示していた。[4]」

ドーフマンのこのような見方は興味深いものであるけれども、いさゝか単純にすぎるように思われる。ヴェブレンは果してどの程度までノールウェーの文化的遺産をうけついだのであろうか。ヴェブレンは一体どこでそれをうけついだのであろうか。そしてヴェブレンは果してどこまで自らをノールウェー人と考えたであろうか。

ヴェブレンはノールウェー移民の子としてウィスコンシンの片田舎に生れた。そして彼がその少年時代を過したミネソタの農場は「小ノールウェー」ともいうべき、アメリカ人の社会とは隔絶した自給自足的経済を営んでいたところであった。そこではスカンディナヴィアの文化と風習が強く残っており、言語も主としてノールウェー語が用いられていたようである。事実ヴェブレンも一八七四年カールトン大学に入学したときほとんど英語を知らなかったという。

しかしそれにもかゝわらず、ヴェブレンが果してノールウェーの伝統をうけついだかどうかは疑わしい。ヴェブレンがそのようにみえたのは、彼の強い羞恥心に対する自己防衛の手段としてのみせかけであったのではないであろうか。この疑いは次のような事実にもとづいている。

(1) 通常、アメリカに来た移民は過去を忘れ、新しい天地に活を求めようとして来ること。ただアメリカ化の過程において、先住者たるヤンキー連から「ノルスキー」などと軽蔑せられて、自らのアイデンティティを過去に求めようとすることはありうるが、それは必ずしもアメリカ化の過程を永くこばむものではないこと。

(2) ヴェブレンの父トーマスは最後までノールウェー語しか話さなかったが、決して保守主義者ではなく、京部へでかけて新しい農作機械を購入し彼らの村にそれをはじめて導入したほどの人物であり、彼の影響はヴェブレンの生涯にきわめて大きいと考えられること。

(3) ヴェブレンは彼がのちに訪れたノールウェーにおいて決してアット・ホームに感じなかったこと。[5]

このような事情を考えれば、ヴェブレンがイェールでノルウェー人を同国人として挨拶したこと、彼の学生のなかにはヴェブレンを「ノールウェー愛国者」とみたものがあったことなどはむしろヴェブレンの「よそおい」としてうけとられるべきように思われる。アルヴィン・ジョンソンの伝えるところによれば、ヴェブレンは、彼の授業に有名な訪問者があるときは、ことさら強いノールウェー・アクセントで話をしたという。[15] 彼の「よそおい」である。

しかし彼が移民の子であったという事実は、その文化的遺産をうけついでいたにしろ、いないにしろ、彼の思考の方向に大きな影響があったことは疑いえないであろう。それは彼自身の真のアイデンティティを失わせることによって、一人で立つことのたよりなさと、そして一人でたつことによる自由とを獲得せしめたのである。ヴェブレンにあるのはドーフマンの云うような二つの文化の真正面からの衝突であったのではなくて、彼の時代と彼の生きた文明とを局外に立ってもっとも客観的に眺めることができるという武器なのであった。

ヴェブレンの学問は機構の動きをたえず見つめることにはじまる。周知のように彼は「物質文明の生活史」を研究することによって独自の経済学を建設したのであった。彼は数字に弱く統計を利用することこそ知らなかったが、彼は常に自らの研究する諸制度について How do they work? と問い、How Should they work? とは尋ねたとしてもどく否定的な意味においてであった。

二〇年代のヴェブレン

彼は他の人が進歩とみたところを単なる変化とみたのである。このような態度が彼をしてもっともリアリスティックな学者の一人としたのであった。したがってヴェブレンは常に彼自身の経験するところから出発する。それが一人で立たなければならなかった人間の頼るにたる唯一の基盤なのであった。

このような精神的態度をもつように運命づけられていたヴェブレンを思想家としてまた社会科学者として教育したのは何よりもまして西部の存在であった。ヴェブレンはコーネル大学やイェール大学で学んだよりも、はるかに多くアイオアの農場から学んだのであった。[17] ウェブレンには一つの学問的転機がある。ヴェブレンの生涯の「ゴルゴタ」とでもいわれるべき時期である。それは彼が一八八四年イェールで「博士」号をとったのち、彼の学問的秀抜さにもかかわらず、就職の機会にめぐまれず、以後七年間、故郷の農場で孤独と敗残の日々を送ったことである。彼はこの強制された苦しい閑暇を根抵まで考えることに用いたのであり、それ以後（一八九一年）ヴェブレンの考え方にはいかなる根本的変化も起らなかったのである。[18] そしてヴェブレンのこの時代の中部辺境こそレスター・ワードをつくり、フレデリック・ターナーをつくり、ヴァーノン・パリントンをつくり、チャールス・ビァードをつくり、その他、東部の賢人たちが造った思想様式を打破した多くの人々を生んだのであった。

それゆえにヴェブレンの経済学も、東部の進歩主義や大陸の革命的経済学においてよりも、西部の農業的急進主義のかたちにお

いてはるかによく理解されうると思われるのである。東部の学生たちを困惑に陥れたヴェブレンの観察や洞察、そして彼の経済理論も、中部辺境の農民たちにとってはごく常識的なことであったかもしれないのである。

ヴェブレンの技術者と実業家の区別は大陸横断鉄道の敷設という建設的な仕事とそれらを搾取して不当な利益をえる破壊的な仕事とを――グレンヴィル・ドッヂと「損をしてまで名誉をとりもどす必要はない」と考えたジェイ・グールドやジェームズ・フィスクとを――比較したカンサスのポピュリストたちの考えを組織化したものであろう。彼のビズネス・サボターヂュの理論は取引所の隅に山と積まれた小麦や、燃料に使われるとうもろこし（運送価格が高く市場へ送りだせばかえって損になるため）を見る農民たちの実感したところであろう。不況は格価体制に固有のものであって経済体制に固有のものでないという彼の理論は一八九二年のポピュリストの政綱に予想されたものであり、ブライアンの第一次十字軍のテーゼでもあった。既得権益（Vested Interest）とは「何もないもの」のかわりに「何かあるもの」をうる法上の権利であるとしたヴェブレンの定義は幾百万エーカーという土地が鉄道に無償交付され、価値のない土地が木材資源や鉱物資源を含む土地と交換される法的からくりを見てきた西部の農民たちによってもっとも正しく評価されたであろう。ヴェブレンのアメリカのビズネス精神についての記述――寂静主義（Quietism）、用心第一、妥協、共謀、策略――は東部の担保会社に十二パーセントづゝを支払っているすべての中西部農民が経験から知っているところを痛切に指摘したものであったと思われるのである。

このようにしてヴェブレンの思想と思考態度をささえたものは、彼の移民的性格からくる冷静な観察態度と彼を教育した西部の存在であったのである。

(三)

「近代科学における建設的な仕事、将来に残るような仕事をするために要求されることは精神の懐疑的な枠である……その人（ユダヤ人）は知的平和の攪乱者になる。しかしてそれには地平線の何処か彼方に休むべきところを求めて歩む旅人、人住まぬ荒野を放浪する人にならなければならぬ。[9]」と一九一九年にヴェブレンは書いた。この彼のユダヤ人に対する言葉は、淋しく狷介なヴェブレンの生涯を知るものにとっては彼自身の魂のうめき声のようにも思われるのである。シカゴ、リーランド・スタンフォード、ミズーリの各大学をつぎつぎと去らなければならなかったヴェブレンは、そのころニュー・ヨークで、ザ・ダイアル紙の編集者をしていた。彼は人生に疲れを覚えていたけれども、なお知的に充実した生活を送っていた。彼は精力的に書き、飽きると探偵小説を読んだ。探偵小説を読んでいることを知られるのが恥しくて彼はいつもそれをベッドの下にかくしていた。[10]まもなく彼は新しく設立された「ニュー・スクール・オヴ・ソーシャル・リサーチ」（The New School of Social Research）に職をえたが、そこに

はビァードも、ウェズレイ・ミッチェルも、そして若いハロルド・ラスキーもいた。ヴェブレンの論文は次々と紙上にあらわれたし、著書も次々と出版されていた。

このころに書かれた彼の著書のうちでもっとも注目すべきものは「技術者と価格体制」(The Engineers and the Price System)であろう。この書物はザ・ダイアル紙上にあらわれた論文をあつめて、一九二一年に出版されたものである。この本にいたってはじめて、ヴェブレンは彼のあらゆる思想の論理的帰結と思われる技術者による経済統制という考えを明らかにしたのであった。

元来、ヴェブレンの科学的個性はいくつかの相矛盾した要素がおりなす複雑な色調を示しているのであるが、この本も例外ではない。一般にヴェブレンの考えによれば、人類の将来は明るいものではない。彼によれば、不況、恐慌、そして好況は単なる偶然ではなく、ビズネスの正規の過程に現われる現象であって、その結果、独占は増大し、組織労働者と組織資本家との対立は激化し、過剰資本は戦争へ、外国投資へ、そして植民地獲得に向わざるをえなくなるのである。この場合、人間は習慣的動物であるがゆえに、人間の知性は破壊的社会慣習の侵入に対して有効な安全弁とはなりえないとするのである。しかしヴェブレンは技術的要因の影響という点になるとたんに極端な楽観主義になってしまう。おそらくこの意味では「技術者と価格体制」はもっとも特異なかたちの楽観主義にみちた書物である。

この書物で「技術者」はヴェブレンにとっての万能薬的存在であることが明瞭になる。技術者は「勤労者本能」をもって能率を増進し、生産を拡大し、経済体制に積極的に貢献する唯一のグループである。もしこれらの技術者が団結してゼネストを行えば、たとえそれが人口のごくわずかの部分であっても、古い秩序を崩壊せしめるに充分であり、ビズネス・サボタージや金もうけ主義の金融機構を破産せしめるに足るのである。そのためには技術者のソヴィエトが成立しなければならない。そしてそれによって既得権益(Vested Interest)や不在所有(Absentee Ownership)が打棄されなければならない。ヴェブレンはさらにこの本の最後の章で技術者のゼネストから新しい秩序にいたるまでの準備的行動要綱とでもいうべきものまで説いているのである[11]。

このような万能薬的政策理論の背景をなしている心理学は、今日からみれば、おそらく簡単にすぎるものである。すなわち、技術の発達は思想の古い形式を崩壊せしめ、人々を「外延的世界の事実の知識」に向わせ、そのときに「人間の再生」が容易になるというのでは素朴な即物的心理学であるにすぎないのであって、グルーチもいうように「ヴェブレンが新しい心理学を知らなかったことは致命的であった[19]」のである。政策に万能薬はない。ヴェブレンは彼の学問的生涯の最後になって、彼の先輩、ヘンリー・ジョージやエドワード・ベラミのおちいった誤りに足をふみこんだのであった。そして万能薬の存在を信じても人々がそれを飲みそうにないとき、人間はいかりとあせりと絶望とを感じるのである。

とにかくこの時期――ごく短い時期――ヴェブレンは、奇好なかたちではあったが、楽観を最高にまで持ちえたのであった。

この時代のヴェブレンの積極面は次のようなラスキーの言葉からもよみとることができる。「ヴェブレンは私を彼の急激な洞察のひらめき……と驚くべき広範な知識および記憶によって印象づけた。彼の話を冷笑的として記述するのは容易であったであろう。しかしすぐにこれは、実は彼が表面にだしたがらない深い情緒の動きをかくすための保護色であることがわかる。……私がはじめて彼に会ったころ、彼は彼に価する評判を得はじめたころであった。そして彼の長い戦いがようやく成果を生みはじめたことを感じて彼が恥しがりながら喜んでいるのをみるのは非常に心動かされるものがあった。[13]」

ヴェブレンには認められることをよろこぶ積極性が残っていたのである。ミッチェルもまたヴェブレンが近代的社会主義の基礎を置いたと云われて喜んだという事実を述べている。[14] ニュー・スクールでヴェブレンは「文明の経済的要因に関する特殊研究」なる講座を担当していた。給料は六〇〇〇ドルであり、彼はその大部分を貯蓄し、カリフォルニアのぶどう園に投資していた。一九二三年にはオイル会社に投資して金をもうけたこともあった。ヴェブレンはそれを自慢した。彼の次の新しい書物、そして彼の最後の書物となった「近年における不在所有とビズネス企業」(Absentee Ownership and Business Enterprise in Recent Times)も完成に近づきつつあったのである。

しかし、一九二四年になると事情はすっかり変ってきた。もともとヴェブレンは講義の上手な方ではなかったけれども、ニュー・スクールでも彼は学生に人気をえようとするような努力は一切しなかったばかりか、むしろ学生に彼の講義をとることをやめて、他の講義をとることをすゝめるようになった。ヴェブレンのクラスは第一日目こそ満員であったが、日がたつとともに学生数は減少し、最後にはほんの一握りの学生になってしまうのであった。ヴェブレンの声は相変らず小さく、彼の講義は相変らず難解であった。彼の講義の休講が次第に多くなった。ヴェブレンは病気であると述べたが医者に診断されると何処も悪くないのであった。そして彼はついにニュー・スクールを去り、その後定職につくことがなかったのである。

一九二四年にはヴェブレンは非常に疲れていた。そして何もかもうまくいかないようにみえた。彼はルービンに書いて曰く、「私は次に何をしてよいのかわからないのだ[15]」と。

アメリカはまさにビズネスの黄金時代を迎えつゝあった。ヴェブレンが悪意をこめて痛罵したビズネスこそ今やアメリカの国民的宗教になりつゝあった。フロリダでは気ちがいじみた土地投機が始ろうとしていた。シカゴでは酒の密買を通じるギャングの跳梁がめざましかった。青年はほろつき自動車やラジオに熱中し、婦人は煙草を吸い、口べにをつけショート・スカートをはいて酒をのむことを覚えた。少年たちはみんな将来の大実業家を夢みていた。モーゼもキリストもセールスマンと考えられる「繁栄の一

〇年」が来たのであった。

ヴェブレンが予言したような不況は起りそうにもなかった。そして彼が主張した技術者のソヴィエトのごときはまさに幻想であるにすぎないかのようであった。彼の影響をうけてできた技術同盟（Technical Alliance）もすぐ失敗した。ここにいたってヴェブレンはますます孤独に沈んでいかざるをえなかったのである。すべては彼の信じたあるいは期待したところとは逆の方向にすゝんでいるようであった。彼は人間に対する絶望と同時に彼自身に対する絶望をも感じたのである。

一九二五年アメリカ経済学会が長い討論のすえ、ヴェブレンが学会の会員になるという条件で彼を会長に選んだとき、ヴェブレンはそれを拒否してしまった。そして後に友人に向って「それを拒絶するのは愉快極まることであった。彼らは私がそれを必要としたときそれを私に提供しなかった」と述べた。同年彼がロバート・ブルッキングズ大学院を訪問していたとき、講義を依頼されたが彼はこれをも拒絶した。一九二六年、ついに彼が住んでいた家の女主人が死ぬと同時に、彼はカリフォルニアへ隠遁してしまうのである。そこで彼は友人もなく、金もほとんどなく、東部へのホーム・シックになやまされながら、彼がその到来を予言した大不況をもみることなく、まさにその直前の一九二九年八月三日、淋しく死んでしまうのである。

一方この間、ヴェブレンの業績は次々と、単にアメリカだけではなく広く海外に認められつゝあった。ジョン・モーリス・クラークはヴェブレンを賞讃していたし、ミッチェルやコモンズは彼にはじまった学問的伝統をうけついでいた。海外ではゾンバルトやマックス・ウェーバーがヴェブレンの業績を高く評価していた。彼の一般的人気はますます高まっていった。しかしヴェブレンは既に絶望していた。ヴェブレンは自分が決して正しく理解されないであろうことを知っていた。「最近の思想の習慣が文化的進歩を……達成するいかなる保証をもたない」ことを知っていたのである。ヴェブレンの経済学がもっとも大きな賞讃をうけたのはヴェブレンの真の絶望を理解しない人達からであった。かくして彼の名声は彼がもっとも徹底的な拒絶をうけた一〇年間に生れたという皮肉な事実が生じたのである。彼が自分の異説を訴えた社会がその異説の奇妙さにのみ寛容であり、その異説の実証に即座の拒否を与えたことは、時代の趨勢とはいえ、ヴェブレンの不幸であった。

四

二〇年代のヴェブレンをしてこれほどまでの孤独と絶望におとしいれた歴史的な要因は何であったか。すでに論じたようにヴェブレンの思想と思考態度をささえた二本の柱は彼の移民性と西部の存在とであった。この二本の柱が、前の世代にはアメリカ人独自の思考方法を生みだすのに大きな貢献をしながら、一九二〇年代にはきわめて力弱いものに化していったのであった。そして一九二〇年代には前の世代とは異った新しい型のアメリカ人が要請

せられるのである。そしてまたその新しい型のアメリカ人はヴェブレンのもつ特異な個性とはまったく不調和なものであった。

二〇年代をどのように把握するかについてはアメリカ史家の間でも充分に研究されているとはいえない。そればかりか、むしろニュー・ディールの劃期的性格と、フランクリン・ルーズヴェルトのけんらんたる活躍に眼をうばわれた史家たちは、二〇年代をあたかも三〇年代の前史でしかすぎないように考える傾向があるようにみえる。換言すれば、二〇年代と三〇年代の断絶性は充分に強調されても連続性は無視され、せいぜいのところ、三〇年代の恐慌の原因を二〇年代にもとめる程度のことであったと云えば云いすぎであろうか。その責の一半はニュー・ディールの「革命的」意義を強調しすぎたニュー・ディーラーたちも負うべきであろうが、とにかく二〇年代には二〇年代としての充分な意味があるのであって、それを軽視することは許されないのである。

アメリカの二〇年代を特徴づけるいくつかの要因のうちで、もっとも強烈な印象をわれわれに与えるのは、いわゆる「アメリカ国民」の成立ということではないであろうか。もちろんいわゆる「アメリカ国民」なるものが二〇年代にいたって突然成立したというのではない。それはアメリカ建国以来、いやむしろそれ以前から、いくつかの山や谷を迎え、それを超えて除々に発育成長したものであることは疑いえないが、しかしそれにもかかわらず、充分な意味での「アメリカ国民」成立の時期を二〇年代と考えるのは単なる憶測にとどまるものではない。二〇年代の若干の事実はこのことを示唆しているように思われるのである。第一の事実は一九二四年における移民法の成立である。移民制限の動きはこれ以前からも存在したが、この法律は周知のごとく移民の総数を毎年一五万人に限定し、各国への割当数を一八九〇年国勢調査における各外国生れアメリカ人数の二パーセント以下と定めたものであって、とくに東欧および東洋からの移民をしめだしたきわめてきびしいものであった。この法律の成立は、アンドレ・シーグフリードも考えるように、アメリカ国民が自らが充分に成熟するに至ったのを感じたこと、新しい時代が彼らの前に開けたことを示したものである。シーグフリードによれば、これは南北戦争以来の米国史上において最大の事件であった。[18] もちろんこの法律を成立せしめた直接の原因は他に多くあるであろうが、より本質的には、それは国民として成立したアメリカ人が自分自身のアイデンティティを維持するための予防手段であり、自己防衛の本能の発露であると考えるべきであろう。さらにまた第一次大戦後の各種のアメリカ化運動やナショナリスティックな運動もこのような意味において解釈されてよいであろう。

これらの事情は、アメリカが自らの欲するもの、自らがあらんとするところのものを決定したことを意味するであろう。したがって今日アメリカ的であると考えられる多くの性格は一九二〇年代に生れたものである。それは人々の道徳的、宗教的態度から、一般的な日常習慣――女性の口紅や喫煙、スポーツ、映画、自動車等――にまでわたっているのである。[19]

アメリカ国民の形成という事実は移民性の減少と同時に、地域性の減少、消滅を意味する。アメリカはかつては、異る十三の国であった。またアメリカは、東部、南部、西部という三つの地域にすぎなかった。鉄道の発達は、とくに南北戦争後の大陸横断鉄道の完成はこれらの地域性を多少とも減少せしめたが、二〇年代におけるラジオ、自動車及び道路、電信の実用化は圧倒的な力で地域間の垣を破壊していったのである。

このようにしてヴェブレンの思想のよって立つ二つの支柱は、アメリカ国民の形成と共にくづれていった。そして二〇年代に成立することになったアメリカ人は、ビジネスの好況とも相俟って、もっとも楽天的な性格を要求されたのであった。アメリカにも異端者の伝統は残っていた。しかし、それは微々たるものになりつゝあり、成立したばかりのアメリカ国民なるものの重圧をうけていたのである。

ヴェブレンの異端は徹底的なものであった。彼は従来の支配的思想に徹底的に反逆した。彼はいわば偶像の破壊者であり、建設者ではない。彼はいつも、冷い目で、時としては嘲笑をうかべながら自分のまわりに渦まく思想の潮流から身をさけて立っていた。彼は古典学派の経済学者を否定した。しかしプラグマティズムの思想家と結びつくことをも拒否した。彼は保守主義者と戦った。しかし急進主義者と同盟することもなかった。彼は決して投票に行かなかったし、いかなる政党にも参加しなかった。彼の思想の影響のもとに発展した多くの改革運動にも殆んど関係をもたなかった。彼の叛逆はあまりにも叛逆的であるために異端者ですらろうばいし、彼の異端はあまりに異端的であるために正統派をも非正統派をも驚せたのであった。

このようなヴェブレンが二〇年代に徹底的に拒否されたことはまことに自然なことであった。このことは、ヴェブレンとコモンズを比較してみればさらに明らかになるであろう。コモンズはヴェブレンが診断者であり偶像破壊者であったとすれば、治療者であり建設者であった。そしてヴェブレンが主張してやまなかったプラグマティックな経済学を現実に適用し、より高度の実証性、帰納性を獲得したのである。この二人には多くの共通点がある。まず第一にコモンズはヴェブレンと同様中部辺境の子であり、ヴェブレンと同様困窮の中に育ち、労働に慣れていた。ヴェブレンと同様コモンズもまた大学の保守主義の犠牲者であり、大学から大学へと移り、リベラリズムとコミュニズムを混同した理事たちからの攻撃にさらされた。両者は共に理論を観察と経験からみちびき、共に古典派経済学に対して懐疑的であった。

しかし二人の気質は全く異っていた。コモンズは楽天的な人間であった。コモンズの送った人生は決して易しいものではなかったけれども、彼は常に陽気さを失わなかった。コモンズの思想的背景は「アメリカ」にあった。彼はデモクラシーこそはアメリカのもっともアメリカ的なところであると信じていた。性格においても彼は全く新しく成立したアメリカ人の代表型であった。快活で、適応性に富み、容易に失望しない人間であった。彼は批判的

であったがそのために幻滅を感じる方ではなかった。彼のユーモアは決してシニシズムにならないのである。彼は富が平等に分配されていないことを知り、ヴェブレンの資本主義に対する攻撃を知っていたが研究調査に金が必要となったとき、何時でも遠慮なく親しい百万長者に依頼するのであった。

コモンズが新しく成立した「アメリカ人」の代表的人間であることは疑いえない。彼のプラグマティズムにおいてそうであり、彼の妥協、常識、説教、好奇心の強さ、ユーモア、単純さ、理論的のなさにおいてそうであった。ヴェブレンは移民性と西部性をもちつづけたに反し、コモンズはそれらを克服した新しいアメリカの代表選手であったのである。[15]

五

ヴェブレンの遺言は有名なものである。ヴェブレンは死体を火葬にし、その灰を海または海へそそぐ河川へすてること、墓石、記念碑、館、タブレットその他一切を建てるべからざること、追悼文、写真、伝記、手紙類など一切出版すべからざることという[16]のであった。この遺言が遺体の処理をのぞいて実行されなかったのは幸運なことであった。ともかくこの遺言からもこの世に対する彼の徹底的絶望がうかがわれるのである。

古典は古典であり、それは時代を越えた生命をもつ。ヴェブレンの労作のかずかずは今もなおヴァイタルな力をもつ。彼がその時代にいれられなかったことは歴史の流れからみれば小さなことであるかもしれない。けれども、六〇年代にすむわれわれは、ある意味でもっともアメリカ的な経済思想が、もっとも非アメリカ的な人間によってその基礎を置かれたという皮肉な歴史の事実に直面してとまどいを感じるのである。[17] 歴史における「皮肉」の概念はきわめて新しいものである。[18] しかしヴェブレンをみるとき、ことさらその概念の有用性を感じるのは筆者のみではあるまい。

(1) Joseph Dorfman, *Thorstein Veblen and His America* (The Viking Press, 1934)

(2) *American Economic Review*, Papers and Proceedings Vol. XLIII, May 1958, pp. 1～34

(3) David Riesman, *Thorstein Veblen* (Charles Scribner's Sons, 1953)

(4) Joseph Dorfman, *The Economic Mind in American Civilization*, Vol. III (The Viking Press, 1949) p. 434

(5) Riesman, *Thorstein Veblen*, pp. 4～5

(6) Dorfman, *Thorstein Veblen and*‥‥, p. 451

(7) Henry Steele Commager, *The American Mind*, 1950 p. 238

(8) Dorfman, *The Economic Mind*‥‥, p. 437

(9) Veblen "The Intellectual Pre-eminence of Jews in Modern Europe" *The Political Science Quarterly*, (March 1919)

(10) Dorfman, *Thorstein Veblen and*‥‥, p. 450

(11) Veblen, *The Engineers and the Price System* (The Viking

Press, 1921)

(12) Allan Gruchy, *Modern Economic Thought—The American Contribution—*, 1947, p. 124. ff.

(13) Dorfman, *Thorstein Veblen and…*, p. 151

(14) *Ibid*, p. 455

(15) *Ibid*, p. 487

(16) アンドレ・シーグフリード　現代のアメリカ　昭一六、青木書店　一六九頁
　　木下半治訳

(17) Frederic Lewis Allen, *Only Yesterday*, (Harper, 1931) Passim.

(18) Commager, *The American Mind*, pp. 243—246

(19) Dorfman, *Thorstein Veblen and…*, p. 504

(20) ニーバーオーテス・ケーリ訳　アメリカ史の皮肉　社会思想研究会出版部　昭二九